



□ フォト・エッセイ □

マヤの神々——グアテマラ——

写真・文
小林グレイ愛子
Aiko Kobayashi Gray

イースターの時以外は聖職者の家にまつられているマシモン像と祈りを捧げるソロラのシャーマン（サンティアゴ・アティトラン）（デニスグレイ撮影）

今年三月、わたしが住んでいる北カリフォルニアの友人五人を連れてのグアテマラのイースターの旅を計画した。イースターの時期に行くのは六年ぶりのことで、わたしの心は期待感であふれていた。

四カ月前に手に入れたチケットは、朝早くグアテマラに着く好きなフライトだ。ところがサンフランシスコからロス行きの便がキャンセルとなり、乗れるはずだったグアテマラ行きの便は私達がロスに着いたときには一五分前に出た後だった。わくわくしていた思いが一気に悪夢の一日になるとは、誰が想像していただろうか。

しかも不思議なことは、混んでいるイースターの時期なのに、ロスで乗りこぼれたのはアジア人がほとんどの私達六人とグアテマラ人の五人のみだ。

わたしは「やられた！ 人種差別だ！」とすぐわかった。怒鳴りまくるわたしへの係員の横柄な対応、その上後で明らかになったのは、グアテマラ人に配られた食事券は私達のものより一〇ドルも安いものだった。差別の中にもさらにランクがある現実をその時学んだ。

こんな理不尽な扱いを受けて、誠意のある回答を得るまではとわたしは今だに航空会社と交渉し続けているが、明るくたくましいグアテマラ人はこんな時どんな神に祈るのだろうか？ 憤慨しながらも締めつけるムードの彼らを見てみると「あきらめの神」もいるのではないかと思った。



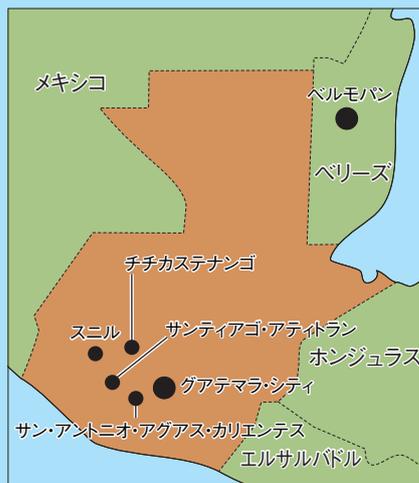
カトリックとマヤの混合宗教のサントトーマス教会にささげる花を持つ聖職者達（チチカステナンゴ）（デニスグレイ撮影）



キャンドル、お香、バラの花びら、桃の葉、湖水を使っての新生児八日目の名命儀式。キリスト、聖人達の名と共に父なる太陽、母なる月の先祖に感謝をと念える。女性シャーマン、エレーナはお産婆さんでもある（サンティアゴ・アティトラン）（デニスグレイ撮影）



呪いもかなえる白人顔のサンシモン像（スニル）（デニスグレイ撮影）



グアテマラには、スペイン人が持って来たカトリック以後も、様々なやおよりのマヤの神様がいます。いまだにカトリックの聖人像にはマヤの神様が隠れている混合宗教だし、もちろんいろいろな偶像崇拜や洞くつ信仰など古くからの民族の信仰形態も残っている。

こんなことがあった。トルティヤ（とうもろこしの粉でできた主食）を作っている時、丸く焼き上がったものをわたしはふちが上にそったものを下にして籠に入れてしまった。すかさずそばにいた女性が「裏返しにしたら表の神様が焼きもちやくわよ」と。これは表の神様の力が強いということではなく、それぞれの神様のおさまる場所があるんだろうと解釈したのだが。

また、カルロスというメディスンマンからは「マラリアにかかった時に煎じるキニーネの葉は三枚、五枚というように必ず奇数の枚数を使うんだ」とジャングルの中で聞いた。マヤの人達にとって偶数は完全数、神様の数字だから人間は使ってはいけないのだと。

また民俗衣装の上に着るウイピールの織り物は、二枚をつなげるものが多いが決して完璧な左右対称にはなっていない。どこかで柄を崩しているか、サイインに思える柄を織り足している。完璧なものは神にしかできない、それを人間がしたら神を怒らせてしまうからだと聞いたこともある。

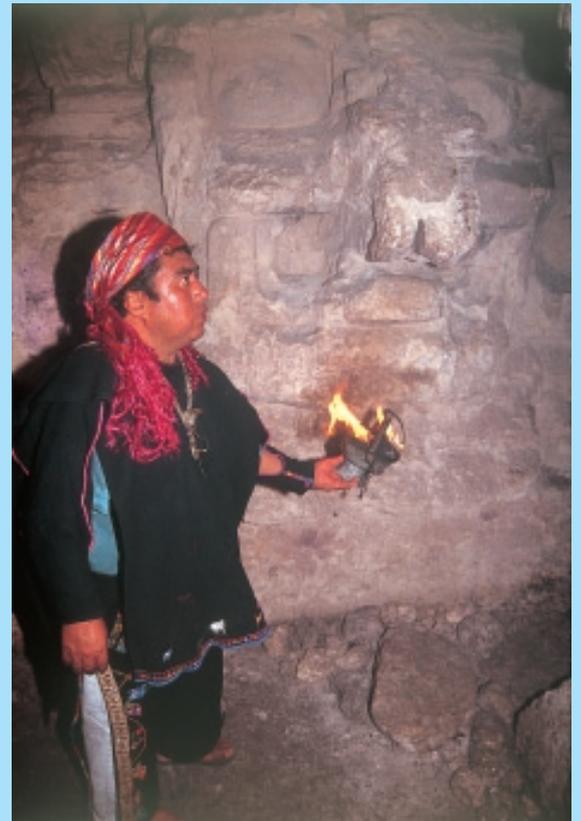
グアテマラの宗教観を現わすものに、双



たくさんのスパイスの入ったグアテマラ料理のシチュー・ペビアンを作っているソイラ。手前は主食のトルティーヤ（サン・アントニオ・アグアス・カリエンテス）（筆者撮影）



中心に青い双頭の鳥コッツが織り込まれているウピール（民族衣装）（デニスグレイ撮影）



雨の神チャックとシャーマン（ティカル）（デニスグレイ撮影）

頭の鷲コッツと呼ばれる伝説上の鳥がある。民俗衣装の柄として良く織り込まれているが、それぞれの頭が善と悪を見ているといわれている。違う方向を均等に見ているということはそれぞれが勝つことも負けることもないという善悪二元性の考えだ。

そして二元性というと、今回訪れたサンティアゴ・アイトランのイースターのことを想う。

片やキリストの受難劇がカトリック教会を中心に行われている中、呪いもかなえるマヤの神様マシモン像が、解体され（キリストの死）そして再生する（キリストの復活）というキリストをなぞっているかのような劇を演じている奇祭だ。

もしキリストを善（表）とするなら、マシモンは悪（裏）の象徴として民衆の笑いを誘い、祭りを盛り上げる重要な役だ。

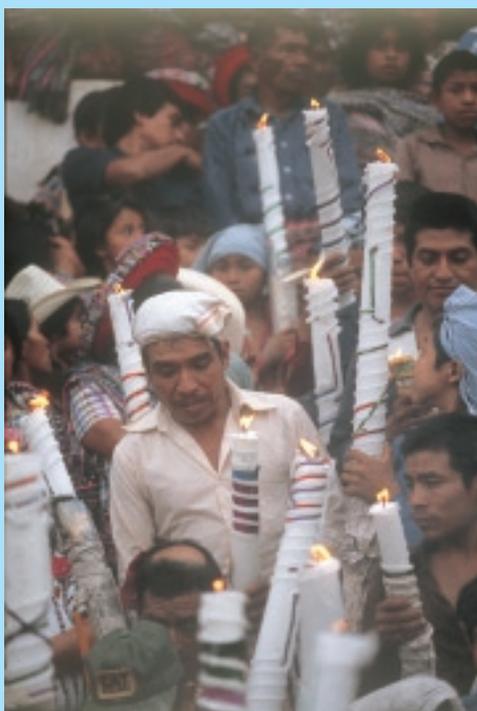
つまりイースターの主役は二人いることになる。

人であふれかえっている教会堂の中では、横たわったイエス像に口づけをするために泣きながら並んでいる女性達。一方、教会脇の青い丸屋根の小礼拝堂では、マシモンが柱にくくりつけられているのを一目見ようと、遠くからやって来た人達でやはりにぎわっている。

いよいよ祭りも佳境に入り、十字架から降ろされ棺に入れられたキリスト像が厳粛な面持ちの若者達によって一晩中かつがれ、悲しみの行列をする。これからが祭りの一



教会から出発するキリストの寝館行列（サンティアゴ・アティトラン）（筆者撮影）



キリストの寝館行列を迎える人々（サンティアゴ・アティトラン）（デニスグレイ撮影）



復活の日曜日の聖人行列と聖職者の妻達（チチカステナンゴ）（筆者撮影）

番の見せ場だ。

この寝館行列が教会から厳かに行きつ戻りつ、のゆっくりとしたペースで出発すると、広場では今か今かとマシモン像の登場を待っている人々の熱気でむせかえっている。

やがてテリネルと呼ばれる役職の人にかつがれたマシモンは、キリストの行列とは関係ないよ、というかのようにそっぽをむいたままゆっくりと行列の後を歩く。そして数時間後、寝棺が広場中央にさしかかった時、マシモンは突然駆け抜けてその寝棺を追いこして行くのだった。その時の人々の熱狂と笑いは、まさに重い寝棺を悲しみに満ちた思いでかつぐ若者の苦しみの行列とは両極にある。マシモンはイエスを裏切った弟子のユダだという説もあるが、もしそうであるならば一層キリスト教やスペイン人に対するマヤ人の皮肉な思い、抵抗の形が込められていることだろう。

そして人々の一体化した熱いエネルギーは、マシモンがやはり主役なんだと語っているかのようだ。

（こばやしぐれい あいこ／タペストリー作家）